

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2026 年 9 月 1 日

学部・学科名 世界教養学科

担当教員氏名 ヴァミューレン服部美香

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習
2. プログラム名称	世界教養学科 中期留学
3. 渡航先国名	オーストラリア
4. 派遣期間	2025 年 8 月 29 日(金) ～2025 年 11 月 24 日(月) 88 日間
5. 派遣先教育機関名	グリフィス大学
6. 参加学生数	9 名
7. 派遣目的	語学研修に加え、ホームステイプログラム、ボランティア活動などで英語運用能力を高める。インターンシップで仕事として専門性の高い会話を鍛えるとともに多文化・多民族社会の中でどのように生きていくのかという将来のビジョンや自分のコンフォートゾーンが広がることを目指す。
8. 派遣内容	世界教養中期留学プログラムは、9 週間の語学研修と約 2 週間の職場体験、現地の祭り（Matsuri Brisbane）でのボランティア活動を含む 3 ヶ月間の留学プログラムである。渡航前には「オーストラリア学習会」を実施する。この学習会では、オーストラリアの概要、歴史、多民族社会の形成過程、教育制度、文化について本や論文を用いながら学ぶ。学生は興味のある分野を調査し、意見や情報を交換することで、渡航先への理解を深めることを目的としている。 オーストラリア到着後は、ブリスベンのグリフィス大学（GELI）で習熟度別の英語クラスを受講する。ここで英語を集中的に学び、多国籍のクラスメートと交流することで、各国の文化や習慣についても学ぶ。働く際に必要な Blue Card の手続き、現地のコーディネーターによるセッション等で職場

	体験に備える。また、勤務先についての事前研修では、派遣先についての情報収集を行う。 約 3 万人の来場者がいる現地の祭り(Matsuri Brisbane)では本学のブースを設け、日本文化の紹介イベントを行った。 現地での約 2 週間の職場体験では、専門性の高い英会話スキルを磨くことができる。ストレスの多い環境での作業を経験する中で、職場内でのコミュニケーションの取り方や、職員の職業観・ライフスタイルについて学ぶ機会を得る。これにより、卒業後の社会生活を見据え、職業観や人生観を見直すきっかけとなる。職場体験後にはそれぞれの体験を振り返るために、現地で発表会の機会を持つ。 多文化・多民族化が進むブリスベンでは、多文化共生を体験する機会が多い。異なる文化背景を持つホストファミリーとの生活は、生の英語に触れる貴重な場であると同時に、異文化理解を深める契機となる。また、多文化・多民族社会での生き方を考えるきっかけとなり、コンフォートゾーンを広げる研修である。
9. 成果	ブリスベンのグリフィス大学 (GELI) では、習熟度別の英語クラスで集中的に英語を学んだ。授業内容としては、文章を読んでディスカッションを行うものから、文法、語彙力の強化、ライティングなど多岐にわたり、非常に充実したものであった。また、クラスメートは多国籍であり、韓国、中国、ベトナム、タイ、マレーシア、モンゴル、ペルーなどさまざまな国からの留学生と交流することができた。彼らの文化や習慣に加え、学ぶ姿勢や人生観からも多くの刺激を受ける学びの場であった。 現地の祭りでは、日本文化を見直し、英語で語ることができたことで、自信にもつながったとの声があがっている。 現地での約 2 週間のインターンシップでは、負荷の高い環境で対応せざるを得ず、真の意味でのコミュニケーション力を鍛えることが出来た。また、職場内での効果的なコミュニケーション方法や、職員たちの職業観・ライフスタイルについても学ぶ機会を得た。この経験を通じて、卒業後の社会生活に向けて職業観や人生観を見直す大きな契機となった。職場体験の派遣先からは勤勉さ、コミュニケーション力において高い評価を得た。また、職場体験終了後にそれぞれの経験について英

	語で発表をする機会を持つことで、それぞれの経験をより客観的に見つめる機会となった。現地スタッフにとっても、次回の研修に生かすための重要なフィードバックとなっている。 ブリスベンが多文化・多民族化が進む都市であり、多文化共生を体験する機会が非常に多い。異なる文化背景を持つホストファミリーとの生活では、生の英語に触れるだけでなく、異文化理解を深める重要な場となった。この経験により、多文化・多民族社会でどのように生きていくかという将来のビジョンが形作られるとともに、自分のコンフォートゾーンを大きく広げることができた。この研修は、当初の目標を遥かに超えた満足度の高いものとなった。
10. 備考	

以上

世界教養学科 中期留学に参加して

24051083

溝田胡春

私は中期留学への参加を通して、異なる価値観や文化に触れたことで、自分自身の価値観を深く見つめ直すきっかけを得ることができました。

留学前は自分がどんな価値観を持っていて、何を大切にしているかを具体的に考えたことがほとんどありませんでした。しかし、ホストファミリーとの生活やクラスメイトとの交流を通して、自分の中にある譲れない軸や、逆にこだわらなくてもいい部分がはっきりと見えてくるようになりました。

海外で生活すると、日本で当たり前だと思っていたことが必ずしも通用しない場面が多く、その度に自分の思考を柔軟に変える必要がありました。こうした日々の積み重ねが、自分の価値観を客観的に見つめ直すきっかけにつながると感じました。

特に印象的だったのは、働き方や時間の使い方に対する考え方が日本と大きく異なっていたことです。オーストラリアでは、仕事より家族との時間や自分の生活を大切にする文化が強く、自分のペースを尊重する空気があります。日本にいた頃は「周りに合わせること」が当たり前でしたが、こちらでは「自分がどうしたいか」をはっきり言うことが求められ、その違いに何度も驚かされました。自分の中の当たり前が壊れ、本当に自分に合った生き方を考えるきっかけにもなり、日本での習慣や働き方に対して、以前よりも広い視点で考えられるようになりました。

日本文化の良さとして、相手を思いやり、気遣い合う精神は誇れるものだと思います。しかし、その一方で同調圧力や厳しいルールの中で生きていることにも気づきました。海外に出て初めて、日本の文化が絶対的に正しいわけではないと理解でき、良いところも課題も両方を客観的に見られるようになったのは、大きな収穫だと感じています。他国の文化を知ることで、自分が暮らす場所に対しても柔軟に向き合えるようになり、どこにいても生きやすくなるのだと実感しました。

言語面でも大きな変化がありました。英語で生活する環境では、相手の反応がダイレクトに返ってくるため、日本にいた時よりも自然とリアクションが増え、表情や声のトーンも明るくなりました。そのため、初対面の人と話すことに抵抗がなくなり、自分でも驚くほど積極的にコミュニケーションが取れるようになりました。街を歩いているだけで多国籍の人々に出会えるため、外見や服装だけで判断されることも少なく、ありのままの自分を受け入れてもらえる安心感がありました。この環境が、自分を自然体でいられる大きな要因になったと思います。

また、海外の生活では何でも自分で解決しなければならず、はじめは不安に感じることも多くありましたが、その度に「自分でやるしかない」と心を決めて行動しました。小さな成功体験の積み重ねによって、自分の行動への自信が育ち、日本にいた時よりもはるかに自己肯定感が高まりました。誰かに頼らずに乗り越えた経験は、これからの人生でも大きな支えになると思います。

留学を通して感じたのは、「自分らしい生き方」を見つけるうえで、海外生活は本当にかげがえのない経験だということです。ホストファミリーや友人、学校のクラスメイトとの関わりの中で見つけた新しい価値観や視点は、今後の人生において必ず大きな力になると確信しています。

